

「見える」を好む日本語学習者

—— 可能の意味を表す「見える」と「見られる」の
使い分けに関するアンケート調査からわかること ——

森 敦子

1. はじめに

「見える」は自発動詞であり、「なんばに行けば映画が見られる」という場合の「見られる」は「見る」という動詞の可能形である。どちらも「対象物を視覚でとらえることができる」という意味を表すが、使われ方は異なる。

(1) ママ、見て。お星様が見えるよ。(山内・清水)

(2) 今日はお母さんが許してくれないから、テレビが見られない。(山内・清水)

(3) 東京タワーに上れば、富士山が見える / 見られるだろう。(飯田)

(1)の「見える」は「見られる」に置き換えることはできない。同様に、(2)の「見られる」は「見える」に置き換えることはできない。一方で、(3)のように「見える」と「見られる」が置き換え可能な場合もある。

日本語非母語話者(以下、非母語話者と表記)を対象にした日本語教育では、「見える」と「(可能形の)見られる」(以下、「見られる」と表記)はどちらも初級の文法項目として扱われている。しかし、代表的な初級日本語教材や文法解説書において、「見える」「見られる」の使い分けに関する記述は非常に少ない⁽¹⁾。両者の使い分けに関する規則を、言語直観のない非母語話者の立場に立って整理し直し、学習者に提示しやすいように体系化することが必要なのではいだろうか。そのためにはまず、非母語話者が「見える」「見られる」をどのように理解し、使用しているのかを知らなければならない。そこで、言語使用実態を明らかにすることを目的に、「見える」「見られる」の使い分けに関するアンケート調査を行うことにした。

まず、アンケート調査に先立って、2で「見える」「見られる」の用法分類を行う。続いて、3で調査対象、4で調査方法、5で調査結果について述べる。6では、代表的な初級日本語教材における「見える」「見られる」の扱われ方を概観し、本調査の結果と合わせて考察を加える。

なお、「見られる」の元となる動詞「見る」には様々な意味・用法があるが、本調査では

「視覚で対象物をとらえる」という意味の「見る」に限定し、その他の意味・用法については扱わない。

2. 用法分類

非母語話者の誤用パターンを分析するためには、まず「見える」「見られる」を用法毎に分類し整理する必要があるだろう

山内・清水（2001）は、「見える」「見られる」を自発、能力可能、状況可能、心情可能の4つに分け、自発と能力可能は「見える」、心情可能は「見られる」を使用するとしている⁽²⁾。また、「日本語においては、可能表現よりも自発表現の方が好まれる」（山内・清水（2001:109））という仮説のもと、状況可能の中で自発の条件を満たすものは「見える」を使用し、自発の条件を満たさないものは「見られる」を使うとしている⁽³⁾。この分類をもとに「見える」「見られる」を筆者が11の用法に分類したものが以下の表1である。

表1 「見える」「見られる」の分類

能力可能	①視力・視覚能力を問題にする場合 (4) (視力検査で) この字が見えますか。(山内・清水)	
自発	②眼前性 ⁽⁴⁾ がある典型的な自発表現。特に可能の意味はない (5) ほら、あそこに絵が見えます。(飯田)	見える
	③特出すべきものが目に飛び込んでくる／眼前性なしも可。 (6) 膝が見えるような短いスカートは禁止です。(山内・清水)	
	④風景描写 (7) 窓のむこうにドロール街の教会の塔が蒼黒く浮かんでいる。 藍色になった夕空を斜めにきって塙の群れが帰るのが見えた。(飯田)	
	⑤見え方を問題にする場合 (8) 君のりんごのほうがいいように見える。(山内・清水)	
モダリティー	⑥判断を表すモダリティー表現 (9) 彼は野菜が嫌いだと見えて、さっきから肉ばかり食べている。(山内・清水)	
状況可能	⑦状況可能だが、自発の条件を満たし自発と解釈しうるもの (10) おい、黒板が見えないよ。ちょっとどいてくれないか。(山内・清水)	両方
	⑧状況可能で、二通りの解釈が可能なもの (11) あの山の頂上に登れば、摩周湖の全景が見える／見られる。(山内・清水)	

	⑨状況可能で、「自然に目に飛び込んでくる」という自発の条件を満たさないもの (12) 新宿に行けば、いろいろな映画が見られます。(飯田)	見られる
	⑩状況可能で、「視野内のものが」という自発の条件を満たさないもの (13) 最近はこのキャンパスでも留学生の姿が見られる。(山内・清水)	
	⑪心理的問題に着目したもの (14) あいつの顔は、とても見られたもんじゃない。(山内・清水)	

動詞の可能形の中で対になる自発表現を持つものは「見られる」(及び「聞ける」)だけである。本来なら可能形を用いて表現するべきもののいくつかを「見える」という自発表現で代用していると考え、と、「見える」「見られる」の使い分けを習得するには、自発という概念の理解が重要であるといえるのではないだろうか。そこで本調査では、非母語話者の自発表現における誤用の傾向を探るため、山内・清水(2001)が「自発」とまとめているものをさらに細分化(表2②③④⑤(⑥))し、それにもとづいてアンケート調査を行うことにした。

3. 調査対象

本調査では、奈良教育大学に在籍する非母語話者の中で日本語能力試験2級(N2)以上を取得した者(及び同等の日本語能力を有する者)を日本語上級学習者と仮定し、調査対象とした。また、比較対象として日本語母語話者(以下、母語話者と表記)にも同じ内容のアンケート調査を行い、非母語話者26名、母語話者22名から回答を得た。非母語話者の国別内訳は以下の通りである。

中国16名、ベトナム2名、ポーランド2名、カンボジア1名、韓国1名、ロシア1名、チリ1名、オーストリア1名、ドイツ1名

4. 調査方法

アンケートの質問はすべて単文の穴埋め形式で、それぞれの文において適切だと思う語を選ぶ選択問題とした。

(質問例) なんばに行けば、いろいろな映画が()。

1. 見える 2. 見られる 3. わからない

「見える」「見られる」どちらも使用可能であると判断した場合には、1と2の両方を選

択するよう指示した。また、「わからない」という選択肢を設定することで、山勘による回答を避けた。用法別の質問数は、以下の表2の通りである。

表2 用法毎の質問数

用法	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
質問数	3	3	3	3	3	3	5	5	5	5	3

なお、アンケート調査実施後に用法⑥の質問1題に不備が発覚したため、該当質問を省いた計40問を分析対象とした。

5. 調査結果

5.1 全体の正答率

3.1の分類をもとに作成した模範解答を「正答」とし、以下の二通りの方法で正答率を算出した。

正答率A = 正答選択肢を選択したすべての人数 ÷ 全被験者数

正答率B = 正答選択肢のみを選択した人数 ÷ 全被験者数

正答率Aは、例えば正答が1の場合、1のみを選択した者も、1と2の両方を選択した者も、どちらも「正答者」としてカウントし、計算した。被験者が「正答」を適切な使い方であると認識しているか否かを測る目安となる。一方、正答率Bは、例えば正答が1の場合、1と2の両方を選択した者（＝誤答である2も選択した者）は「正答者」としてカウントせず、1のみを選択した者だけを「正答者」としてカウントし、計算した。「見える」「見られる」の使い分けの習得度を測る目安となる。

全40問の正答率は表3の通りである。

表3 アンケート全体の正答率

正答率A		正答率B	
非母語話者	母語話者	非母語話者	母語話者
63.56 %	91.23 %	58.37 %	73.05 %

上級日本語学習者を対象に行った調査であるにもかかわらず、非母語話者の正答率は高くない。「見える」「見られる」の使い分けを習得することの難しさを端的に示していると言えるだろう。ここではまず、正答率Aに注目したい。母語話者の正答率Aは91.23%と高く、大多数の母語話者が「正答」は適切な使い方であると認識していると言える。一方、非母語話者の正答率Aは63.56%であり、残り36.44%の非母語話者は、複数回答が可能で

あるにもかかわらず、あえて「正答」を選択していないのである。つまり、36.44 %の非母語話者が、「正答」は適切な使い方ではない」と認識していると言える。一方、正答率Bは、母語話者でも73.05 %と決して高いとは言えない結果が出た。誤答に対する許容範囲には母語話者の中でも個人差があるということがわかる。また、正答率Aと正答率Bの差を見てみると、母語話者が18.18ポイントであるのに対して、非母語話者は5.19ポイントと差が小さい。非母語話者には言語直観がないため「正答」が適切であるかどうか判断できない場合が多い一方で、習得した項目に関しては「見える」と「見られる」の違いを規則通り正確に理解していると考えられるのではないだろうか。

次に、「正答」が「見える」のものと、「正答」が「見られる」のものとを比較してみたい。

表4 「正答」別の正答率

正答	正答率A		正答率B	
	非母語話者	母語話者	非母語話者	母語話者
「見える」	71.15 %	97.11 %	65.03 %	74.38 %
「見られる」	68.34 %	93.71 %	62.72 %	76.22 %

「見える」「見られる」どちらも使用可能である用法⑧を除いた10の用法を、「正答」が「見える」のもの（用法①～⑦）と「正答」が「見られる」のもの（用法⑨～⑩）に二分し、それぞれの正答率を求めた。正答率Aでは母語話者・非母語話者ともに「見える」の方がわずかに正答率が高くなっている。とはいえ、両者にそれほど大きな差は見られない。「見える」「見られる」のどちらか一方の理解度に問題があるというわけではなさそうである。

5. 2 用法別正答率

用法別の正答率を、表5にまとめた。

表5 用法別の正答率

用法	正答率A		正答率B	
	非母語話者	母語話者	非母語話者	母語話者
①	74.36 %	100.00 %	70.51 %	86.36 %
②	71.79 %	100.00 %	66.67 %	93.94 %
③	61.54 %	98.48 %	52.56 %	80.30 %
④	75.64 %	100.00 %	69.23 %	87.88 %
⑤	79.49 %	98.48 %	74.36 %	72.73 %
⑥	51.92 %	90.91 %	51.92 %	86.36 %
⑦	74.62 %	92.73 %	65.38 %	40.00 %
⑧	17.69 %	58.92 %	17.69 %	58.92 %

⑨	77.69 %	95.45 %	73.08 %	79.09 %
⑩	67.69 %	92.73 %	58.46 %	70.91 %
⑪	53.85 %	92.42 %	52.56 %	80.30 %

用法⑧は「見える」「見られる」両方を選択した人のみを「正答者」として扱っているため、他の用法と比べ正答率が極端に低くなっている。用法⑧に関しては、5.4で詳しく分析することとし、ここではそれ以外の用法について分析する。

母語話者においては、用法⑧を除いた10の用法の正答率Aはすべて90%以上であり、用法によって目立った差はない。強いて言えば、用法⑥⑦⑩⑪は95%を下回っており、他の用法に比べて若干低くなっている。一方、非母語話者においては、用法によって正答率Aにばらつきが見られる。用法⑧を除いた10の用法の正答率Aの中で、平均値(63.56%)を下回っているのは用法⑥(51.92%)、用法⑪(53.85%)、用法③(61.54%)の3つである。

用法⑥と用法⑪に関しては、母語話者の正答率Aも同様に(若干ではあるが)低くなっている。「対象物を視覚でとらえることができる」という本来の意味から少し離れた派生的な用法であり、そのことが正答率の低さに影響しているものと思われる。また、非母語話者の回答で3「わからない」を選んだ割合が最も高かったのは用法⑪である。アンケート調査終了後に被験者から「用法⑪はどう判断したらいいのかわからなかった」「用法⑪は習った記憶がない」という意見も出た。「見える」「見られる」は初級で提示される文法項目であるため、一般的に導入の段階では用法⑥や用法⑪のような派生的な用法は扱われない。それは学習者の負担を軽減するという意味から考えて当然のことである。しかし、上級レベルで用法⑥や用法⑪のような派生的な用法が出てきた時には、それらは既習事項として扱われてしまい、結局深く学ぶ機会がないまま学習が進んでしまうのではないだろうか。構造的には初級項目であっても、中級・上級のレベルでしか扱わない意味用法に関しては、注意して指導していく必要があるだろう。それは「見える」「見られる」に限ったことではなく、すべての文法項目に共通して言えることである。

一方、用法③は自発表現の一つである。母語話者に関しては正答率Aは低くない。母語話者と非母語話者の間で理解度に大きな隔たりが見られるのである。つまり、用法③は言語直観のない非母語話者にとっては難解な自発表現であると言えるだろう。したがって、日本語教育の現場で自発の「見える」を導入・練習する際には、用法③の使い方にも慣れさせる工夫が必要だと言えるだろう。

5.3 状況可能な「見える」「見られる」

(15) 彼は字が読めない。(能力可能)

(16) 朝は忙しくて、新聞が読めない。(状況可能)

(17) 事実を知るのが怖くて、手紙の続きが読めない。(心情可能)

(15)～(17)は動詞「読む」の可能形を用いた表現の例である。このように、「見る」(及び「聞く」)以外の動詞の場合、可能形を用いて能力可能・状況可能・心情可能のすべてを表現することができる。しかし動詞「見る」の場合、文脈によって「見える」「見られる」を使い分けなければならない。中でも状況可能は、「見える」を使用するもの(用法⑦)、「見られる」を使用するもの(用法⑨⑩)、どちらも使用可能なもの(用法⑧)と3パターンあり、複雑である。そのため、アンケート調査を行う前は、「見える」「見られる」の混同は状況可能の使い分けの困難さに起因するのではないかと考えていた。特に用法⑦は状況可能であるにもかかわらず可能形ではなく「見える」を使用するという例外的なものであるため、非母語話者にとっては習得が難しく、そのためアンケートでの正答率も低くなるであろうと予想していた。

しかし調査結果を見ると、状況可能の正答率が他の用法の正答率と比較して特別低いということはない。上級学習者にとって、状況可能の「見える」「見られる」を使い分けることは、それほど困難なことではないようである。しかしながら、用法⑦の正答率には特筆すべき点がある。用法⑦の正答率Bは非母語話者が65.38%、母語話者が40.00%で、非母語話者の正答率が母語話者の正答率を大幅に上回っているのである。非母語話者と母語話者の正答率が逆転しているこのような現象は、全11の用法の中で用法⑦だけである。言語直観があるはずの母語話者の正答率Bが低いということは、用法⑦は「見える」「見られる」どちらの性質も持ち合わせており、判断の難しい用法であるといえるだろう。これは、調査前の予想通りである。

それにもかかわらず、非母語話者の正答率が他の用法と変わらないのは何故だろうか。その要因の一つに、日本語教育における「見える」「見られる」の扱い方があると考えられるのではないだろうか。非母語話者には日本語の言語直観がないため、学習した知識や文法規則が実際の言語使用に大きく影響する。日本語教育現場で使用されている主な初級教材を調べると、状況可能の例としては圧倒的に「見える」を使用するものが多く採用されているのである。日本語教材における「見える」「見られる」の扱われ方については、5の考察で詳しく述べたい。

5. 4 状況可能で「見える」「見られる」どちらも使用可能なもの(用法⑧)

状況可能を表すものには「見える」を使うものと「見られる」を使うものとがあり、どちらを使用するかは、山内・清水(2001)の言う「自発の条件」を満たしているか否かで決まる。「自発の条件」を満たしているもの(用法⑦)は「見える」、満たしていないもの(用法⑨⑩)は「見られる」を使用する。また、下岡(2005)は、可能形はある事態が成立する可能性について述べる表現であるため、事態が成立したことが明確である場合には用

いないとしている。逆に、「見える」の最大の特徴は眼前性・現場性があることであり、事態が成立していないことが明らかな場合には「見える」は使用できないとしている。つまり、状況可能で、見る対象物が既に目の前に存在する場合（用法⑦）には「見える」を使い、目の前に存在せず「見る」という動作が成立する可能性について述べる場合（用法⑨⑩）には「見られる」を使うと考えられる。

状況可能の用法⑦と用法⑨⑩の違いは、以上の通りである。用法⑧は、どちらも解釈しうるものであり、発話意図によって「見える」と「見られる」を使い分ける。（18）は実際のアンケート調査で使用した用法⑧の例文である。

（18）そのビルの屋上にのぼれば、大都会の夜景が見える／見られる。

この文の場合、二通りの解釈が可能である。まず、話者の視点が屋上に登るという事態が成立した後の（未来の）時点にある場合には、既に目の前に大都会が存在しているため、「見える」が使用される。逆に、話者の視点が今話をしている地上にある場合、「見る」という動作が成立するかどうかの可能性について述べる文となるため、「見られる」が使用される。このように、「見える」を使う場合と「見られる」を使う場合とでは表す内容は同じではない。とはいえ、用法⑧では両者が厳密に区別されているわけではなく、調査結果からもわかるように、母語話者においても使い分けには個人差がある。（18）の例でも、「見える」を使う場合と「見られる」を使う場合とで、伝達される意味内容が大きく変わることはない。では、実際には用法⑧において「見える」「見られる」のどちらを使うことが多いのだろうか。

表6 用法⑧における「見える」「見られる」の選択率

	非母語話者	母語話者
「見える」選択率	68.46 %	94.55 %
「見られる」選択率	48.46 %	62.73 %

アンケートでは用法⑧の例文を5つ使用した。非母語話者の被験者は26名なので、用法⑧に関してはのべ130の回答を得たことになる（母語話者はのべ110）。「見える」および「見られる」が選択された総数をのべ回答数で割り、それぞれの選択率を計算し表にしたものが表6である。非母語話者・母語話者ともに「見える」を選択している割合が高いことがわかる。この結果は「日本語においては、可能表現よりも自発表現の方が好まれる」という山内・清水（2001）の仮説とも合致していると言える。また、山内・清水（2001）は、状況可能の中で「見える」を使用するもの（用法⑦）に関して、「「見える」が「見られる」を浸食してしまった領域」と表現している。「見られる」の選択率が低いということは、用法⑧に関しても「見える」の浸食が進んでいると考えられるのではないだろうか。

6. 日本語教材における「見える」「見られる」の扱われ方

日本語に限らず語学を学習する際には、その言語の規則を過度に一般化し誤用を引き起こす「過剰般化」という現象が起こりやすい。(15)のように、日本語では状況可能は動詞の可能形で表現するのが一般的な規則であるため、用法⑦⑧では過剰般化により可能形「見られる」の選択率が高くなるのが自然である。ところが、アンケートの調査結果では、用法⑦⑧ともに過剰般化とは正反対の現象が起きているのである。もちろん、母語話者が「見える」を好んで使用している以上、それが非母語話者の言語使用にも影響するのは当然である。しかし、4. 3で見た用法⑦の正答率の逆転現象からもわかるように、母語話者の言語使用と非母語話者の言語使用が常に一致・比例しているわけではない。母語話者の言語使用以外にも、非母語話者の言語使用に影響を与えているものがあると考えられる。

非母語話者の多くは日本語を「学習」して習得している。本調査の被験者に限って言えば、全員が初級から上級まで国内外の日本語教育機関において日本語教育を受けてきている。日本語教育における「見える」「見られる」の扱われ方も、非母語話者の言語使用に影響を与える一要因であると考えられるのではないだろうか。

一般的な初級日本語教材で、「見える」「見られる」が導入される課と、その課で用いられている例文の数を以下の表7にまとめた。

表7 初級日本語教材における例文数

教科書	「見える」		「見られる」(可能形)	
	導入課	例文数	導入課	例文数
みんなの日本語	27 課	10	27 課	0
初級日本語	17 課	6	16 課	0
げんき	15 課	2	13 課	0 ※

※可能形の活用表では「見られる」が使用されている。

可能形が導入される課で、「見られる」を使った例文が一例もないことがわかる。もちろん、実際の日本語教育現場において「見られる」という語に全く触れないで学習が進むわけではないだろうが、少なくとも教科書上には「見られる」という語は一切出てこないのである。一方、「見える」は多くの例文を用いて定着が図られている。「弟の学校から海と山が見えます」のように、「見える」「見られる」とともに使用可能なもの(用法⑧)に関しても、「見える」のみが使用されており、「見られる」は提示されていない。このような日本語教科書を用いて日本語を学習してきたということも、非母語話者の「見える」の定着率の高さの一因として考えられるのではないだろうか。

可能の意味を持つ「見える」「見られる」の使い分けは、母語話者の中でも個人差があり、非母語話者が習得するのは容易ではない。学習者の日本語習得度に合わせて過不足なく適切な指導ができるようになりたいものである。

参考文献

<論文>

飯田透 1997 「見える」「見られる」再考『東京大学留学生センター紀要』7、東京大学留学生センター、pp.43-65

山内博之・清水孝司 2001 「～が見える」「～が見られる」『日本文化学報』10、韓国日本文化学会、pp.107-119

下岡邦子 2005 「可能形態「見られる」と「見える」に関する一考察」『国語学論集』50、龍谷大学国文学会、pp.158-138

<文法解説書>

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 2000 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク

市川保子 2005 『初級日本語文法の教え方のポイント』 スリーエーネットワーク

グループジャマシイ 1998 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版

<日本語教科書>

『みんなの日本語 初級Ⅱ 本冊』 スリーエーネットワーク

『初級日本語』 東京外国語大学 留学生日本語教育センター

『げんき』 The Japan Times

注

- (1) 文法解説書を概観すると、意識せずに視界に入るものには「見える」、意志を持ってみようとした結果見ることができるものには「見られる」を使うとしているものが多い。しかし、それ以上の詳細な解説はほとんどない。
- (2) 山内・清水(2001)は、能力可能でも「彼は手相が見られる」のように例外的に「見られる」が使用されるものもあるとしている。この場合の「見る」は「評価する・占う」という意味であり、「視覚で対象物をとらえる」という意味ではないため、本稿では扱わないこととする。
- (3) 山内・清水(2001)は、自発の条件を「視野内のものが自然に目に飛び込んでくる」とし、その条件を満たさないものは可能形「見られる」を使用するとしている。
- (4) 下岡(2005)は、「見える」と「見られる」の最大の相違点は眼前性の有無であるとしている。
- (5) 飯田(1997)は、無意識に視線を送ったにもかかわらず目にとまる(＝見える)ものは、特出すべき目立つものであるとしている。

資料

<アンケートに使用した例文>

用法①

オオカミは夜でも目が見える。

北極星の隣にある、あの小さな星が見えますか？

交通事故で目が見えなくなった。

用法②

ママ、見て！虹が見えるよ！

バス通りに出ると、少し先にコンビニが見えた。

日本は今、終わりの見えない不況に苦しんでいる。

用法③

ひざが見えるような短いスカートは禁止です。

お母さんの髪に白いものが見える。

犯人の手に何か光るものが見えた。

用法④

レストランの窓からぼんやりと外を眺めると、雨に濡れて光っている道路が見えた。

窓の向こうにはたくさん的高層ビルが立ち並んでいる。その間を、鳩の群れが飛んでいくのが見えた。

3日間降りつづいた雪で、辺り一面雪景色だった。雲の切れま、凍るような夜空に、星といっしょになって遠くの街の灯が見えた。

用法⑤

今日の彼女はいつもよりきれいに見える。

君のりんごの方がおいしそうに見える。

今日は天気がいいから、夜にはきっと星がよく見えるよ。

用法⑥

私には、彼が犯人であるように見える。

彼は野菜が嫌いだとみえて、さっきから肉ばかり食べている。

用法⑦

この席はいつも前の人が邪魔になって黒板が見えない。コピーの字が薄くて見えない。

ビルの屋上から富士山の方を見たが、霧が深くで見えなかった。

そこに荷物を置いたら、テレビが見えないじゃない。ちょっとどけてくれない？

アイドルのコンサートに行ったが、一番後ろの席だったので顔が見えなかった。

用法⑧

そのビルの屋上に登れば、大都会の夜景が見える／見られる。

なにしろ窓から富士山が見える／見られる部屋だから、びっくりするほどの値段であ

る。

彼は立ち止って辺りを見回した。しかし、花子の姿はもうどこにも見えなかった／見られなかった。

彼は引返そうとして後ろを見た。しかし、ホテルは緑の丘にかくれてもう見えなかった／見られなかった。

そのレストランからは、海に沈む夕日が見えます／見られます。

用法⑨

なんばに行けば、いろいろな映画が見られます。

ピカソの絵とモネの絵が同時に見られる、またとないチャンスです。

今日はお母さんが許してくれないから、テレビが見られません。

秋にこの公園に来たら、きれいな紅葉が見られますよ。

ここは歌舞伎が見られるホテルなので、外国人観光客にも人気がある。

用法⑩

最近はこの大学でも留学生の姿が見られる。

町のあちこちに、ドライバーに事故防止をよびかける交通標語が見られるようになりました。

電車に乗ると、本を読んでいる人や勉強している人が見られる。

たんばぼは、日本中どこでもごく普通に見られる花です。

奈良に来れば、シカが見られるよ！

用法⑪

この子もようやく見られる字が書けるようになってきたね。

涙でぐちゃぐちゃで、とても見られた顔じゃない。

恥ずかしくて、彼女の顔がまともに見られない。

森 敦子（本学大学院生）